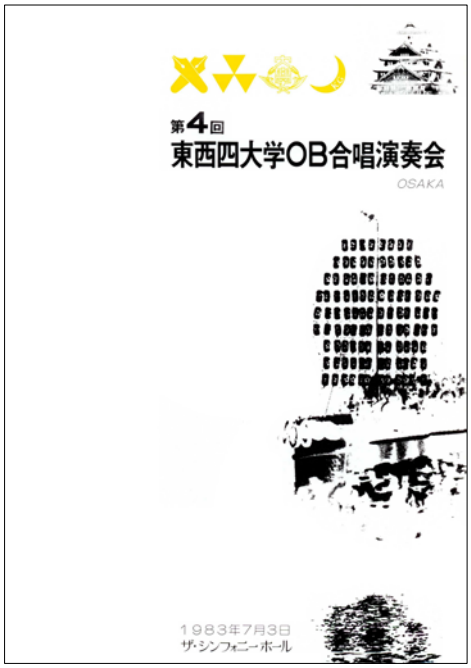
第 4 回東西四大学 OB 合唱演奏会【1983 年（昭和 58 年）7 月 3 日】

ザ・シンフォニーホール



作曲家　**多田　武彦**

何も無かった大地から桜の樹が育ち、毎年花を咲かせては観る人々の心をなごませるように、この日本で、戦後の荒廃の中からある時「四連」が生まれ、現在にいたるまで毎年すばらしい競演を聴かせてくれます。

青春時代のひとときを男声合唱に打ちこんだ多くの人々が、卒業後も忙がしい中を合唱に愛情を感じ練習に励み、今宵第四回の四連 OB 交歓演奏会を開催されることをきき、心から嬉しく思います。

今、しずかに目を閉じて想い起すと、昭和27年、私が京大男声の指揮をしていたとき、はじめて、早大グリー・慶應ワグネルとの交歓会を持ちましたが、爾来、早大グリーについては、当時の指揮者坪井秀夫氏指揮によるダイナミックな演奏、今、鹿島建設で超高層部門で活躍している長沢君の流麗な演奏、「四連」でただ一人学生指揮者として登場し「北斗の海」の名演奏をやってくれた三品君の正統派的解釈など、慶應ワグネルについては畑中良輔先生を迎えてから急成長した演奏ぶり、「さくら散る」の名演、などなど、数多くの感慨が迫ってきます。

私の二番目の弟がお世話になった同志社グリーは、学生時代同じ京都ということで、その名演奏を聴く機会が多く、日下部吉彦氏指揮の黒人霊歌や日本古謡・民謡の編曲ものの演奏は、今も耳のそばで鳴りひびいています。

また、今京都エコーの指揮者として活躍している浅井君や、近年後輩の面倒をみている富岡君の、その時々の音色は、今も同志社グリーに引き継がれ伝統の強さを物語っています。

私の末弟がお世話になった関学グリーは、いつも書きますように、その50周年記念演奏会（昭和24年５月５日）が、私に無伴奏男声合唱の美しさを植えつけた謂わば恩師にあたる団体で、このことがなければ、「柳河風俗詩」も「富士山」も生まれなかったでしょう。

いずれにしても、私自身が執拗なまでに、無伴奏男声四部合唱による日本の抒情組曲を書きつづけてきたのも、「四連」や「その OB たち」の名演奏を、折にふれて聴くたびにまた一つ励まされるような気がしてきたせいとも考えられます。

演奏会のご成功と今後のご発展をおいのりするとともに、四連を巣立った男声合唱マニアの人々の心に、いつまでも、あの深い音楽の美しさが宿りつづけることを併せてお祈りします。